View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

物語系古筆切三種 ―竹取・源氏絵詞・大鏡の各断簡―

著者	田中 登
雑誌名	國文學
巻	83-84
ページ	130-136
発行年	2002-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/2506

物語系古筆切三種

――竹取・源氏絵詞・大鏡の各断簡――

田中　登

はじめに

古筆切の書写内容は、圧倒的に歌集が多く、散文系（物語・日記・説話など）のものがきわめて少ないことは、藤井隆氏が具体的な数字を挙げて、繰り返し強調しているとおりである。[注一]かてて加えて、歌集の場合は、歌の出入りや配列、作者名や詞書の相違などによって、わずかな断簡からでも、容易にその系統を推知できることが多いのに対して、物語ともなれば、少々本文上の異同があったからといって、ただちにそれがどういう系統か結論づけることは難しく、一枚や二枚の断簡からでは、なかなか有効な成果が挙げにくいというのが、実情である。

しかし、近年の古筆切の調査によって、部分的とはいえ、幻の本とまでいわれた小式部内侍本伊勢物語の存在が明らかにされたり、[注二]寝覚物語の末尾欠巻部の内容が報告されていることを思えば、[注三]どんなに道は遠くとも、平安文学研究に携わる者として、やはり古筆切には多大な関心を抱き続けざるをえないのである。

本稿では、こうした観点から、これまでにも一部の識者からは注目されてきた伝後光厳天皇筆の竹取物語、伝津守国冬筆の源氏物語絵巻詞書、伝寂蓮筆の建久本大鏡の各断簡を紹介することにしたい。いずれも、近年稿者が入手したものばかりである。

伝後光厳天皇筆小六半切竹取物語

竹取物語の伝本が、古活字十行本によって代表される通行本系と、新井本によって代表される古本系とに大きく分かれることは、周知

のとおりだが、筆者を後光厳天皇（二条為定とも）と伝えるこの断簡は、通行本系とも、また古本系とも大きく異なる本文を有していることで知られ、これまでにも、度々諸家によって、その存在が報告されてきた。[注4]

ここに紹介するのは、新出の断簡で、もとは小六半形の冊子本。大きさは縦九・四センチ、横八センチ。本来は一面九行詰だが、一行切取られて八行となっている。全文は次のとおり。

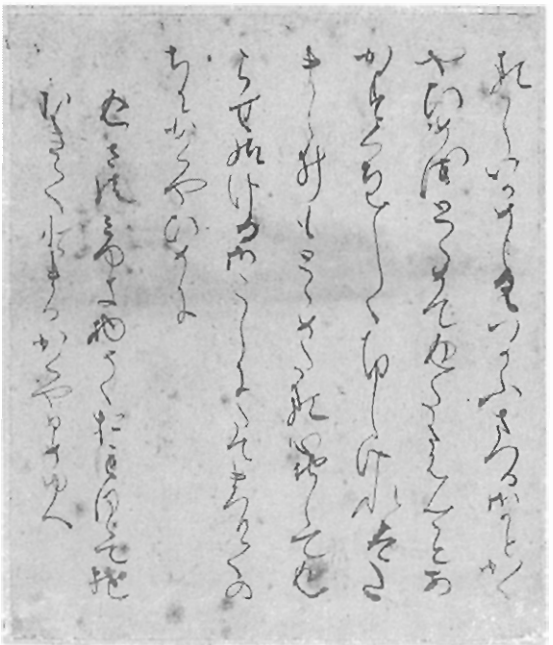
(1) るしいかめしくつかふまつる御かとかく
(2) やひめをとゝめて返たまはんことあ
(3) かすくちをしくおほしけれはた
(4) ましるもとゝめたる心地して返
(5) らせ給ける御こしにたてまつりての
(6) ちにかくやひめに
(7) 返さのみゆき物うくおもほえてそ
(8) むきてとまるかくやひめゆへ

本文の異同を調べてみるに、1行目の「いかめしく」は、古活字十行本「いかめしう」で、断簡は新井本と一致。2行目の「返たまはんこと」は、古活字十行本・新井本ともに「返たまはんことを」とあって、ここは断簡の独自異文となっている。3行目「おほしけれは」は、古活字十行本「おほしけれと」とあって、断簡は新井本と一致。3～4行目の「たましゐも」は、古活字十行本「たましゐを」とあって、これまた断簡は新井本と一致。同じく4行目「心地して」は、古活字十行本・新井本ともに「心地してなむ」とあって、断簡の独自異文となっている。

以上を要するに、断簡は古本系の新井本と一致して、通行本系の古活字十行本と異なる所が三箇所。断簡の独自異文が二箇所となっており、通行本系とは最も遠く、しかし、古本系にも属さない、という従来指摘されている断簡の性格が、ここでも確認されたといえよう。

該断簡を含めて、これまで紹介されてきた、伝後光厳天皇筆の竹取物語切を一覧しておくと、次のようになる（『古筆学大成』の図版の有無を○×で表わした）。

	場面	行数	所蔵者	古筆学大成
1	火鼠の皮衣	九行	毘沙門堂旧蔵	×
2	龍の首の玉	九行	加賀文庫	○
3	龍の首の玉	九行	志香須賀文庫	○
4	燕の子安貝	八行	個人	○
5	帝の求婚	九行	南円文庫	×
6	帝の求婚	九行	田中登	×
7	帝の求婚	九行	田中登	×
8	帝の求婚	八行	田中登	×



伝津守国冬筆巻物切源氏物語絵詞

源氏物語は、それがひと度世に出るや、王朝貴族の大いに持囃すところとなり、数多くの写本が作られと同時に、一方ではまた、絵巻という形でも盛んに鑑賞されたようである。平安時代十二世紀の作になる、いわゆる隆能源氏は、国宝にもなって、あまりにも有名であるが、鎌倉時代に入ってから製作された天理・メトロポリタン本も、絵巻史上逸することのできない遺品である。同絵巻は若紫と末摘花の巻の残巻が天理図書館に、澪標の巻の残巻がメトロポリタン美術館にそれぞれ蔵されている[注5]が、この他にも、詞書が数行ずつ諸家のもとに伝わっているのである。

ここに紹介するのは、初音の巻の冒頭に近く、正月六条院で、源氏と紫上が餅鏡の祝いをしている場面であるが、初音の巻の断簡は、今回初めてその存在が明らかになったものである。もと巻子本で、大きさは縦三一・六センチ、横二二・五センチ。全文は次の七行となっている。

(1) すまひなし給へりさふらふ人〳〵もわ
(2) かやかに勝たるは姫君の御方□と□□
(3) 出給ふてすこしおとなひたるかきりな
(4) か〳〵よし〳〵しくさうそくありさまも
(5) もてつけてこゝかしこにむれゐつゝをの〳〵
(6) はかための祝をしつゝもちゐさえと
(7) りよせてちとせのかけしるきかゝみ

この天理・メトロポリタン本源氏物語絵巻の詞書の性格については、中村義雄氏の考察があり[注6]、若紫の巻、末摘花の巻については青表紙本系統、澪標の巻については河内本に近い別本ともいうべきもの、といった報告がなされている。では、この断簡については、ど

うであろうか（この初音の巻は、『源氏物語大成』の底本は大島本ではなく池田本）。

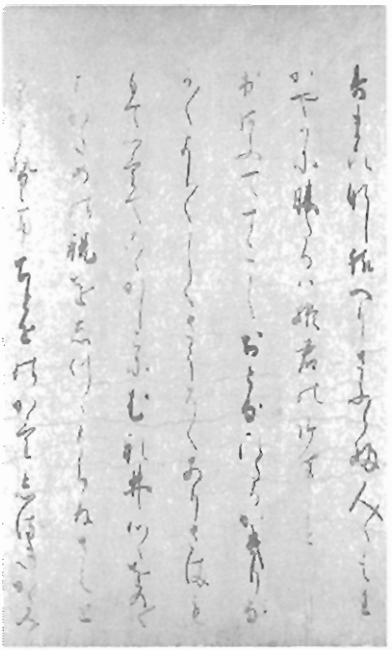
1行目の「すまひなし」は、諸本「すみなし」とあって断簡の独自異文。2行目「勝たるは」は、諸本「すぐれたるを」とあって、やはり断簡の独自異文となっている。2～3行目の「□□出給ふて」は、一部の本が「えらはせ給て」「えり給て」とある他は、多くの諸本「えらせ給て」とあり、これまた断簡の独自異文。4行目の「ありさまも」は、多くの諸本が「ありさまよりはしめてやすく」となっており、ここはあるいは断簡の誤脱があるのかもしれない。5行目の「をの〳〵」は諸本になく、完全に断簡の独自異文。6行目の「祝をしつゝ」は、諸本「いわゐして」でここも断簡独自の表現となっている。同じく6行目の「もちゐさえ」は、諸本「もちゐかゝみをさへ」とあって断簡の独自異文。7行目の「かけしるきかゝみ」は、諸本「かけにしるき」とあって、これまた断簡独自の表現となっている。

以上、わずかな行数ながら、断簡には独自異文がきわめて多く、これを見るかぎり、断簡は青表紙本系とも河内本系ともいえず、別本としかいいようがあるまい。だからといって、現在伝わる別本群の内の、ある特定の本に近いということはまったくなく、まさに独自の性格を持った本だといえよう。

ところで、古来、源氏物語を絵画化する際、この初音の巻の正月餅鏡の祝いの場面は、どのように扱われてきたのであろうか。有名な隆能源氏は、この巻が現存せず、不明だが、秋山虔・田口栄一両氏の『豪華「源氏絵」の世界　源氏物語』[注7]の源氏絵帖別場面一覧によれば、久保惣本光吉画帖・御物探幽五十四帖屏風・正覚寺伊年印五十四帖屏風・バーク・コレクション蔵伝宗達筆八曲一隻屏風などが、この場面を絵画化している由である。ちなみに、絵画化場面を多く集めていることで知られる大阪女子大学蔵の源氏物語絵詞[注8]と石山寺蔵の白描源氏物語画帖[注9]は、いずれもこの場面を取り上げず、この直後、明石の君から姫君に歌（巻名の由来ともなった有名なもの）が送られてきた場面を扱っている。

この天理・メトロポリタン本の源氏物語絵詞についても、若紫・末摘花・澪標の巻を除く、諸家に蔵されている断簡を一覧しておくことにしよう。

	巻名	行数	所蔵者	古筆学大成
1	桐壺	四行	MOA美術館	○
2	夕顔	四行	此君書屋	○
3	若紫	三行	林原美術館	○
4	賢木	六行	藤井隆	×
5	初音	七行	田中登	×
6	若菜下	三行	宮内庁書陵部	○
7	若菜下	三行	個人	○
8	若菜下	四行	加賀文庫	○



伝寂蓮筆巻物切大鏡

大鏡には、周知のように、東松本・千葉本・池田本・建久本などの古写本が伝わっているが、書写年次の明確に知られる最古のものは、建久本である。[注10] すなわち天理図書館蔵本の巻末に「建久三年孟秋上旬染筆了」とあって、建久三年（一一九二）時の書写と知られるのであるが、ただ惜しむらくは、同本はわずかに師輔伝と、それから伊尹伝の最初の十行ほどが残されているにすぎない、ということである。しかし、古筆切の中には、この天理本のツレとおぼしきものがあり、一部識者の間では注目されてきた。管見に入るところ、いずれも伊尹伝のものばかりのようである。

ここに紹介するのも、その伊尹伝の内の断簡。もと巻子本で、大きさは縦二五・七センチ、横一〇センチ。天地に各一条と各行間に墨界が施されており、界高は二二・七センチ、行間はおよそ二・二センチほどとなっている。場面は伊尹伝の内の行成に関する条である。全文は五行で、以下のとおり。

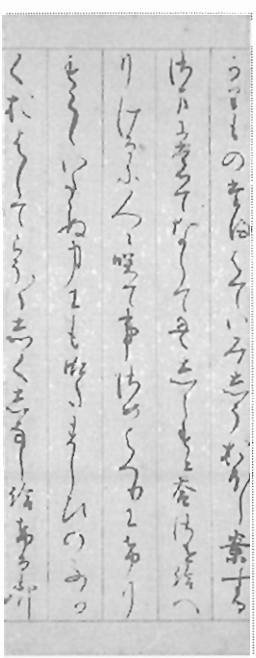
(1) かりものたまはていみしうおほし案する
(2) さまにもてなしてえしらすと答させ給へ
(3) りけるに人々咲て事さめはへりにけり
(4) すこしいたらぬ事にも御たましひのふか

(5) くおはしてらう〳〵しくしなし給ける御

大鏡の現存諸本は、大きく古本系・増補本系・異本系の三類に分かたれるが、建久本は、その内の古本系に分類されているので、ここでは、古本系の代表的伝本たる東松本との異同を指摘しておくと、1行目の「のたまはて」は、東松本「もものたまはて」。5行目の「らう〳〵しく」は、東松本「らう〳〵しう」といった程度である。

最後に、天理図書館に蔵されている分を除いて、建久本の諸断簡を一覧しておこう。

	場面	行数	所蔵者	古筆学大成
1	伊尹の条	六行	不二文庫	○
2	行成の条	五行	椿山荘美術館	○
3	行成の条	五行	田中登	×
4	行成の条	二行	個人	○
5	花山院の条	六行	個人	○



おわりに

以上、近年になって稿者が入手しえた物語系の古筆切を三種紹介してきたが、冒頭にも述べたように、歌集と違って物語の場合、一枚、二枚の断簡が出現したからといって、それがただちに研究上の大きな成果となって跳ね返ってくるといったようなことは、ごく一部の例を除いて、きわめて希なことである。しかし、もともと平安・中世の散文作品は、古写本自体にあまり恵まれていないことを思えば、わずかな断簡といえども、けっして無視されてよいものではなかろう。本文研究そのものに格別貢献はできなくても、享受資料という観点に立てば、これらの切から、我々はいろいろと示唆を受けることもまた少なくないはずである。これまで世に紹介されることなく、むなしく箧底に埋もれていた断簡が、今後一枚でも多く発掘され、光を浴びることを願って、この稿を閉じることにしたい。

（注6）中村義雄『絵巻物詞書の研究』（角川書店　昭和五十七年）
（注7）秋山虔・田口榮一『豪華「源氏絵」の世界　源氏物語』（学習研究社　平成九年）
（注8）片桐洋一『源氏物語絵詞－翻刻と研究』（大学堂　昭和五十八年）
（注9）片桐弥生「石山寺蔵「白描源氏物語画帖」について」（『講座平安文学論究』第八輯　風間書房　平成四年）
（注10）天理善本叢書15『大鏡諸本集』（八木書店　昭和五十年）に千葉本・池田本・建久本ともに収められている。

付記　本稿校正中に、大和文華館の特別展の図録『国宝　寝覚物語絵巻』（大和文華館　平成十三年）に接したが、そこに伝後光厳天皇筆の竹取物語切が三葉収められおり、内一葉が蓬莱の珠の枝の条三行（個人蔵。『小筆学大成』不載）で未見のものであった。したがって、伝後光厳天皇筆の竹取物語切は、これで都合九葉の存在が確認されたことになる。

（たなか　のぼる／本学教授）

注

（注1）藤井隆「古筆切と狭衣物語」（『講座平安文学論究』第五輯　風間書房　昭和六十三年）
藤井隆「物語古筆切の成果」（古筆学叢林5『古筆学のあゆみ』　八木書店　平成七年）
（注2）片桐洋一『伊勢物語の新研究』（明治書院　昭和六十二年）
小松茂美『古筆学大成』第二十三巻（講談社　平成四年）
（注3）田中登『古筆切の国文学的研究』（風間書房　平成九年）
（注4）新井信之『竹取物語の研究　本文篇』（図書出版株式会社　昭和十九年）
久曽神昇『仮名古筆の内容的研究』（ひたく書房　昭和五十五年）
高田信敬「竹取物語断簡新出二葉」（「国文学研究資料館紀要」第十号　昭和五十九年）
小松茂美『古筆学大成』第二十三巻（講談社　平成四年）
田中登『古筆切の国文学的研究』（風間書房　平成九年）
（注5）小松茂美『日本絵巻物大成』第23巻（中央公論社　昭和五十四年）に天理本・メトロポリタン本ともに収められている。